

## 「みあかす」恋：『伊勢物語』二段考

川原田， 祐子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9372>

---

出版情報：語文研究. 88, pp.13-21, 1999-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 「るあかす」恋

——『伊勢物語』二段考——

川原田 祐 子

—

『伊勢物語』第二段の歌「起きもせず寝もせて夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ」は、同時に『古今和歌集』卷第十三恋歌三巻頭歌でもある。

むかし、おとこ有けり。ならの京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし、それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかゞ思ひけん、時は三月のついたち、雨そをふるに遣りける。

起きもせず寝もせて夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

(注)  
『伊勢物語』第二段

弥生の日より、忍びに人にもら言ひて後に、雨のそは降りけるに、よみて、遣はしける

在原業平朝臣

起きもせず寝もせて夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

(注)  
『古今和歌集』六一六番

『伊勢物語』が、春雨の季節に忍ぶ恋の相手に逢瀬の後歌を贈ったという情景を描いたものであることは明白である。では、その明白な状況の核であるこの歌の「起きもせず寝もせて」とは具体的にどんな状態を指すのだろうか。

『古今和歌集』の歌の詞書からは、「弥生の日」「雨」降る頃「人」に歌を贈ったということが看取できるが、詠み贈られた歌の実態は曖昧で、細部に至るまで詳らかであるといえない。『伊勢物語』や『古今和歌集』詞書が伝えるのは歌が贈られた状況であり、恋が成就した後の逢えない鬱屈を伝

える歌なのか、未だ逢瀬さえ遂げられない煩悶を訴える歌なのかすら、歌だけ見ても判然としない。

この歌は、あえてそうした、いずれともとれる詠みぶりのもとに詠まれ、当事者以外には歌の真意を汲み取れないよう仕立てたものという解釈は、平安朝におけるしたたかな恋愛感覚また社会感覚を端的に摘出した指摘といえようが、では、業平以後この歌はどう受け止められたのだろうか。

時代は下るが、『伊勢物語』注釈書類も、この歌句そのものについては、「おきてあかしつるやらん。ふしてあかしつるやらん」また「ぬるともなくおくるともなく」と解すに止まり、それが何を意味するか、どういう状況下を指すのかには言及しない。

鳥、おきもせずねもせでよるをあかしては春のものとながめくらしつ、といへり。なにとよめる哥ぞ。

風、この哥、世間にはさかさまに申なすとかや。ゆゝしきひが事也。たゞ春の夜はさらでだに、あけやすきものときゝならひたるに、としごろ月ごろ、心つくしたる人にからうじてはじめてあひつれば、いとゞふすほどもなく、あへなくおきてあかしつるやらん。ふしてあかしつるやらん。あまりのあやなきにおぼえずと也。春のものと、このはるさめのふるをみてよめり。ながめくらしつといふころを哥のならひにて、ながめくらしつと、秀句によめる也。又したにおもへる心は、夜はきはめて

あけやすかりつるに、もし又、よさりのひまをも見べきに、けふの日のながくてくれがたければ、夜のみじかく、日のながきを、春のならひと思ながら、なげきくらすぞとよめる也。

（傍線は引用者による。以下同）

おきもせずねもせで、心は、只ぬるともなくおくるともなく夜をばあかして、ひるは又春のならひのながめくらしたるさま也。長雨しくらしたる心もこもるべし。是業平の哥のさま也。前の言葉をよく工夫して思ふべし。余情無限者也。

（『伊勢物語首聞抄』）

この態度は、『伊勢物語』現行注も変わらない。また、『古今和歌集』現行注の一つは、この歌は「契りを結んで後になお慕い思う歌」として解すが、果たして本当に「契りを結んで後に逢えないで恋い慕い苦しむ歌」なのか否かは、詞書また『伊勢物語』の本文から判断するのは難しい。しかし、ここに一つ、「おきもせず」歌を後の平安人がどう理解したかを示す例が『高光集』にある。

ある人むすめにものがたりするほどに、女のおやあさましとてもるともにゐあかしてのつとめてかへり

こひやせむわすれやしなむぬともなくねずともなくてあかしつるかな

女のははかへし

ぬともなくねずともなくてあかす夜を恋もなこひそさら  
ばわずれぬ  
(『高光集』三三・三三番)<sup>(注1)</sup>

この二首の歌からは、女に逢いにいった際母親がともにそこに「ゐあかし」のため、二人の逢瀬は成らなかつた状況が看取される。そこで男は、女に逢えたことは逢えたが、その母親同伴という奇妙な夜を指して、「ぬともなくねずともなく」と表現する。それに対して、その母も、その歌句をそのまま返歌に取り入れて、男と応酬している。この贈答歌から考えると、「ぬともなくねずともなく」というのは、逢つたが恋の成就には至らなかつたことを指すと考えられる。

藤原高光は天慶三(940)年生、正暦五(994)年没で『高光集』の成立は『伊勢物語』『古今和歌集』に先んずることはないので、この三三・三三番歌はこれら二者以後の詠である。業平歌の「おきもせず寝もせで」を逐語的に引くわけではないものの、「ぬともなくねずともなく」という表現は、実質的にはこの業平歌の歌句をふまえたものだといえるのではなからうか。

先に述べたように、『高光集』の贈答歌からは、女の母親が「もろともにあかして」恋の障害となり、逢瀬が成立しなかつたことが諸諷味を帯びて表現される。その表現が、『伊勢物語』歌に近似する点を考えると、『伊勢物語』第二段および『古今和歌集』六一六番歌の内実はともかく、それ以後の平安人にとって、「おきもせず」歌は、相手に逢つたが恋の成就

には至らなかつたときの歌と解された時期があつた可能性が考えられる。

では、『高光集』以外の同時代の作品においては、女の元で「ゐあかし」たまま夜を明かしたという例にどのような場合があるのだろうか。

## 二

それは、例えば次のような情景として描かれる。

そのひと(少将のおもと)という女房と、なかのたいのあらはなるにゐあかして、あさぼらけにつまどをおしあげたるに、そらのけしきもをかしうて、人のかたちもをかしう見えければ

あまのとを我がためにとはささねどもあやしくあかぬこ  
ちのみして  
(『実方集』八五番)<sup>(注1)</sup>

詞書の「あらはなるに」は「人の目につく所」であり、女と一晚中そこに座つて過ごした状況が示される。女と「ゐあかして」迎えた朝ぼらけの景色と、その光景のなか照らし出される女の容貌の幻想的な美しさがここでの眼目である。

また、『枕草子』は次のような場面を描く。<sup>(注1)</sup>  
すくよかなるは、「夜ふけぬ。御門あやうかなり」など笑ひて出でぬるもあり。まことに心ざしことなる人は、「はや」などあまた、びやはるれど、猶ゐあかせば、たび

／＼見ありくに、あけぬべきけしきを、いとめづらかに  
思て、「いみじう、御門を、こよひ、らいさうとあけひろ  
げて」と聞えごちて、あぢきなく暁にぞさすなるは、い  
かゞはにくきを、親そひぬるは、猶さぞある。まいて、  
まことのならぬはいかに思らむとさへ、つゝまし。せう  
との家なども、けにくきはさぞあらむ。

夜中、暁ともなく、門もいと心かしこうももてなまず、  
なにの宮、内わたり、殿ばらなる人々も出であひなど  
して、格子などもあげながら冬の夜をゐあかして、人の  
出でぬるのちも、見いだしたるこそ、をかしけれ。有明  
などは、ましていとめでたし。笛などふきて出でぬるな  
ごりは、いそぎてもねられず、人のうへなどもいひあは  
せて、歌などかたりきくまゝに、寝いりぬるこそ、をか  
しけれ。

(一七二段「宮仕人の里なども」)

里下がりのした女房を訪ねた男が「ゐあかし」門が鎖せない  
ため男の帰りを急かす親や門番の様子を批判し、それに対し  
て、厳しく戸締まりもせず格子を上げて「ゐあかし」、男が  
去った後もその余韻を楽しむのがよいとする理想を掲げる。  
人と「ゐあかし」た夜明けの素晴らしさを称揚するのは『実  
方集』と相通じる感覚でもあり、「ゐあかし」男女の情感を示  
唆する好個の例といえよう。

よるもやすぎぬらむと思ふほどに、沓のをとちかうきこ  
ゆれば、あやしと見いだしたるに、時々かやうのをり

に、おぼえなく見ゆる人なりけり。「今日の雪を、いかに  
と思やりきこえながら、なでふ事に障りて、その所にく  
らしつる」などいふ。「今日こん」などやうのすぢをぞい  
ふらむかし。昼ありつることどもなどうちはじめて、よ  
ろづのことをいふ。円座ばかりさしいでたれど、かたつ  
かたの足は下ながらあるに、鐘のをとなども聞ゆるま  
で、内にも外にも、このいふことはあかずおぼゆる。

あけぐれのほどに返とて、「雪なにのやまにみてり」と  
誦したるは、いとをかしき物也。女のかぎりしては、さ  
もえ居あかさざらましを、たゞなるよりはをかしう、す  
きたるありさまなどいひあはせたり。

(一七四段「雪のいと高うはあらで」)

この例は、文脈からは女達の語らいの場に来訪した男の風  
流ぶりを描くように取れるため、恋人同士の場合とはいささ  
か異なるが、互いに話の尽きない親密さから、その応用編と  
考えてよからう。

そして時代がやや下ると、業平歌を意識したかと思われる  
詠作が出現する。

夜ごとにすのこにゐあかすを見いることもなければ、  
かへりて、つとめて

おきてふしふしてはなきぞあかしつるあはれやすぐや人  
はねつらん

かへし

帰りつるほどはいぬるとみえつるをいつのまにかはおき  
てふしつる

風ふき雨ふる夜、れいのすのこにゐあかしてかへり  
つとめて

わたつみによはともいはず世をすぐすあまのをぶねもか  
くはこがれじ

かへし

こがるらむをぶねもなみにしづむとてあま夜の風の吹き  
もきえつる

〔赤染衛門集〕三四一～三四四番〕

三四一～三四四番歌のうち、特に三四一・三四二番歌は業  
平の「おきもせず」歌を直接的に髣髴とさせる。三四一番歌  
を構成する「おき」「ふし」「あかし」、そしてそれを承ける三  
四二番歌を見るに、これらの歌の世界は業平歌を下敷きにし  
た認識のもとに成立しているように思われる。そこからする  
と、『赤染衛門集』の歌は『高光集』歌の例と合わせて、「あ  
あかし」た夜を業平の歌の色合いを込めて表現することが容  
認されていた時期の存在を意味しよう。

つまり、『高光集』に伝わる成就に至らなかつた逢瀬の歌  
は、そのまま、『伊勢物語』第二段が具体的に何も語らない贈  
歌について、一つの理解が示された時期の所産であるとは考  
えられないだろうか。先に挙げた例から、『伊勢物語』以後の  
平安人にとって「ゐあかす」逢瀬は、愛情を伝える、また親

愛が発露される格好の場でもあったことが窺える。そうした  
人々にとって、『伊勢物語』第二段の状況は「ゐあかし」た恋  
であると捉えられていたのではないか。

『伊勢物語』第二段で描かれた、業平と相手の女性の醜化  
された逢瀬の真相がどこにあるにせよ、この業平歌につい  
て、成就しなかつた男女の逢瀬、つまり「ゐあかし」た恋の  
歌という理解が示された時期が、業平没後八〇年を隔てない  
頃からあったということを、この『高光集』歌は物語るよう  
に思われるのである。

### 三

さて『伊勢物語』以後『源氏物語』に至って、「まめ」なる  
人物の恋が何度も繰り返し描かれる。

中でもすぐに思い出されるのが、夕霧と薫それぞれの恋で  
あろう。

まめ人の名を取りてさかしがり給大将、この一条の宮の  
御ありさまをなをあらまほしと心にとどめて、大方の人  
目には、むかしを忘れぬ用意に見せつゝ、いとねんごろ  
にとぶらひきこえ給。下の心には、かくてはやむまじく  
なむ月日に添へて思ひまさり給ける。

（夕霧巻

四・八九頁）

小野で夕霧に廉中に侵入されながら拒んだ落葉宮は、一条

「御息所の死後小野から連れ戻されるが、あくまで拒んで塗籠に閉じこもる。」

一方、薫も物語のなかで「まめ人」として認識される。

かむの君、奥の方よりゐざり出で給て、「うたての御逢や。はづかしげなるまめ人をさへ、よくこそ面なけれ」と忍びてのたまふなり。まめ人とこそつけられたりけれ、いと屈じたる名かな、と思ふたまへり。

（竹河卷 四・二五九頁）

その薫は宇治大君に心引かれ、数回にわたり逢瀬を持つが、大君の死に至るまで、ついに思いを遂げることができなかった。

夕霧の物語を薫と大君の物語の先蹤とみる指摘がなされて久しいが、ここで注目したいのは、夕霧・薫それぞれが「ゐあかす」恋を経験したということそのものである。

夕霧は最終的に思いを遂げ、薫は果たせないまま大君と死別するという結末の異なりはあるものの、そこに至るまでの過程で女君をかき口説いて夜を明かすという経験は両者に相通ずるものである。夕霧と薫は二人とも「まめ人」と形容されるが、そうした人物造型上の関わりは別にして、その恋が両者とも「ゐあかす」恋であったことは物語に明白に語られる。確かに、それらの逢瀬は、『実方集』や『枕草子』で見たような恋の余韻に浸るというには程遠い様相を呈していた。しかしながら、その形態において『源氏物語』では「まめ人」

の恋は「ゐあかす」恋として描かれるという点で『伊勢物語』と軌を一にしているのである。

#### 四

『伊勢物語』第二段は必要最低限の状況説明しか施さないため、詠まれた「起きもせず」の歌が何を告げるものなのか、結局は当事者にしかその真実は分からない。しかしながら、第一節で述べた、この歌を相手に逢ったが恋の成就には至らなかったときの歌とする考えに近い解釈は既にある。

それは、男女が過ごしたのは「いわゆる実事こそなかったものの、簾越しに言葉をかわした」夜であり、「起きもせず」歌は「会いは出来なかったものの、簾越しの一夜の物言いにすっかり感激し切った男がその余韻の中に漸く贈った、時間遅れの、しかも甚だ主観的な後朝の歌」という片桐洋一氏の論である。

歌がどの段階で贈られたかについては、現在のところ意見を持たないが、この「実事こそなかったものの、簾越しに言葉をかわした」という状況は言葉を換えれば、後の人々が理解した「ゐあかした」状態と呼べるものではなからうか。

また片桐氏の「簾越しの、ほんのちよつとした会話」と解釈する『伊勢物語』本文「うち物語らひて」は、他作品に用例がなく未だその指すところが判然としない語だが、その具

体的状況はあるいは「ゐあかす」とも何らかの関わりを持つ  
のかもしれない。<sup>(注17)</sup>

さて、『伊勢物語』第二段の「まめ男」とはどんな男なのだ  
ろうか。現行諸注にいう、恋にまじめ、女性に誠実といった  
ことに止まるのだろうか。そこからもう一步進めて、その人  
物が「恋においても宮仕えとは無縁でいらぬ男の謂」<sup>(注18)</sup>であ  
るとするならば、『源氏物語』の「まめ人」の相貌はなんとそ  
れに似ることであろう。

夕霧はいうまでもなく秀でた律令官人として「宮仕え」の  
中枢に位置し、また薫も冷泉院の寵ついで当代の女二宮に婿  
取られる帝寵を被り、「宮仕え人」の中でも重きを為す人物で  
あった。<sup>(注19)</sup>

その「まめ人」二人ともが「ゐあかす」恋を体験している。  
それが『源氏物語』の「まめ人」の恋であり、同時に『源氏  
物語』における「まめ人」の恋に対する理解の所産であった。  
しかしそれは『源氏物語』にして初めて芽生えた新しい恋の  
形ではなく、はやく『伊勢物語』に描かれた「まめ男」の恋  
と期せずして通じているのであった。<sup>(注20)</sup>

注1 本文は『新日本古典文学大系 伊勢物語』による。

2 本文は『新日本古典文学大系 古今和歌集』による。

3 この状況は業平の家集においても同様である。『在中将集』尊  
経閣文庫蔵(『私家集大成』中古I)(※『新編国歌大観』(第

三巻 私家集編I)所収「業平集」も底本同じ。)七番

やよひのついたりころ、雨ふる日、人の許に

おきもせずねもせてよるをあかしてははるのものとて  
なかくらしつ

『在原業平朝臣集』神宮文庫蔵/詞書なし(『同』)八番

おきもせずねもせてよるを明しては春のものとして詠くら  
しつ

『業平集』書陵部蔵「三十六人集」(『同』)五五番

ある女の、この京にありしに、やよひついたりころ、  
あめふりしにやりし

おきもせずねもせてよるをあかしてははるのものとてな  
かくらしつ

『業平集』正保版「歌仙歌集」/詞書なし(『同』)八番

おきもせずねもせてよるをあかしては春の物とてなかく  
くらしつ

『業平集』書陵部御所本(『新編国歌大観』第七巻 私家集編  
III)五四番

ある女のこの京にありしに、やよひのついたりころ、  
あめふりしにやりし

おきもせずねもせてよるをあかしてははるのものとてな  
かくらしつ

4 今西祐一郎「用心」の歌―『伊勢物語』二段管見―(王朝  
物語研究会編『論叢伊勢物語I―本文と表現―』新典社 平

成一一年九月)

5 『伊勢物語の研究(資料篇)』(片桐洋一 明治書院 昭和四四  
年一月)一三七頁。

6 前掲注5五九四頁。

また、他の注もこの歌の具体的内容に触れているものはない。

『冷泉家流伊勢物語抄』(前掲注5二九八頁)

○おきもせずねもせずと云は、物をおもへば、おくべきひるもおきられず、ぬべき夜もねられずといふ也。

『伊勢物語宗長聞書』(前掲注5六五六頁)

当流には、只ぬるともなく、おくるともなく、夜をあかし、ひるは又春の物とてながめあかし暮たる躰也。

『伊勢物語闕疑抄』(前掲注5七三七頁)。

夜はおきもせずねもせぬやうにてあかし、ひるは春の物とてながめくらしつと云也

『勢語憶断』(契沖全集)久松潜一編 岩波書店 昭和四九年四月)第九卷一三頁

帰り来てその日のくれなとにつかはす心ならば、もろともにきしかたの心つくしをかたり、行末を契りなとしはかなき短夜は、おくともなくぬるともなしに明て、

7 前掲注2脚注一九一頁。  
8 前掲注2脚注一九一頁。

『高光集』(『新編国歌大観』第三卷 私家集編I所収)による。以下、私家集の引用は『新編国歌大観』第三卷(私家集編I)による。

10 『実方集全釈』(私家集注釈叢刊五 竹鼻績校注・訳 貴重本刊行会 平成五年一〇月)一四四頁【語釈】参照  
また、次のような例もある。

かうしのつらによりるあかしたるあしたに、おなじ人(二二番「人」はじめてきこえける)  
あげがたきふたみのうらによるなみのそでのみぬれしお

きつしま人 (『実方集』二二番)

また、次は女が一人で「ゐあかし」た例である。

もとのめをやむごなきものには思ひながら、又しる人おほかりけるに、もとをばはしのまにて物がたりなどして、ここにゐたまへれ、いままるらむとていなければ、まこととて、むしろのかぎりにゐあかして、あか月にかへりきたるに、いたのうへにさへはかりおかれてひえにけり、とうらみければことわりやしたはさこそはひえつらめきみにしくべきおもひなければ (『仲文集』二一九番)

12 本文は『新日本古典文学大系 枕草子』による。

次の「枕草子」の例は、複数の女性の元に複数の男性が訪れる場面である。

屋のいとふるくて、瓦葺なればにやあらむ、あつさの世にしらねば、御簾の外にぞ夜も出で来ふしたる。ふるきところなれば、百足といふ物、日ひとひ落ちかゝり、蜂の巣のおほきにて付きあつまりたるなどぞ、いとをそろしき。殿上人日ごとにまいり、夜もるあかして物いふをきゝて、「豈はかりきや、太政官の地の、いま夜行の庭とならんことを」と誦しいでたりしこそ、をかしかりしか。

(二五四段「故殿の御服のころ」)  
13 本文は『新日本古典文学大系 源氏物語』による。猶以下用

いる「源氏物語」本文も同書に依り、巻・頁数を併記する。  
藤村潔「源氏物語夕霧の巻試論」(香川県高等学校国語研究会誌「国語」一七号 昭和三九年一月、後に「源氏物語の構造」II、宇治十帖の構想成立過程細論 六、宇治十帖の予告) 桜楓社 昭和四一年一月) 石田穰「二夕霧の巻について

て」(昭和女子大学『学苑』三三三三号 昭和四一年一月、後に『源氏物語論集』所収 桜楓社 昭和四六年一月)

15 片桐洋一「『伊勢物語』冒頭三章段の成立と主題」(『中古文』第二九号 昭和五七年五月、後に『伊勢物語の新研究』所収 明治書院 昭和六二年九月)

16 前掲注15片桐論文

前掲注15片桐論文は、「うち物語らふ」は「物語らひす」「語らふ」「物語す」の例から「契る前、実事の前の言葉のやりとりをいう場合がある」と説く。また『古今和歌集』詞書「ものら言ひて」は「簾や凡帳を隔てながらも夜もすがら「物言ひ」明かしたとも解し得る」とする。

18 今西祐一郎「『まめ男』の背景―『伊勢物語』試論―」(福井貞助編『伊勢物語―諸相と新見―』風間書房 平成七年五月) そう考えると、総角巻で薫が大君の死の直前に「豊の明はけふぞかしく、京思ひやり給。」と京を思い遣る場面は別の意味を帯びてこよう。

19 薫と大君の逢瀬は既に森一郎氏によって『伊勢物語』第二段との類似性が指摘されている。

「まめ男」薫は「泣きたまふ」大君をいとしんで、女の心ゆるぶ折を待とうとする。(略)橋姫巻のかいまみこのかたの「忍びがたくなりゆく」恋心を「いと多く聞こえたまふ」(総角巻二二六頁)、『伊勢』第二段の恋の一夜も、さような綿々たる「うち物語らひ」であつたらう。

ひそひそとつづく語り合い。ひっそりとしたそのけはいに、女房たちが大君と薫との間に実事ありと思つたのは、無理からぬところ。まさに外から見れば、夫婦の風景なのだった。起きていたというわけでもない、しかし

ろくに寝もしないで、ひっきょう寝ずに、一夜を語り明かしてしまった。「はかなく明け方になりけり」(総角巻二二七頁)。「起きもせず寝もせて夜を明かし」たのであった。

(『源氏物語考論』笠間叢書207 笠間書院 昭和六二年九月) 二六八頁)

(かわはらだ ゆうこ 九州大学大学院博士後期課程)